

時計の響

加 奈 江

私はふと眠から覺めた。夜中時分らしい。誠に静かである。寝る時はネジを掛けて枕元の机の上に置いた枕時計が、キチ〜とタイムを刻んで居る。絶間なく……………

何何といふ寂しい音だらう。斯くも急しく老い行くのかと思ふと、迎もこんなかに眠つては居られぬ。

『二十二年間何を學んだ?』といふ訊問の聲が耳の奥へ響いて来る。私は蒲團の中からモク〜と這出した。そしていきなり障子をあげた。

何の香もかい青い月光が、サーツと室内へ流れ込んで、茫然とした私の顔をしげ〜と見詰る。

机の横の本箱の上に積んである、本の脊の金文字が、眠つて居た私の視神經を呼び起す様に強く眼に泌み入る。

私は氣障りなので、冷たい時計を取り上げて耳

元へあてがつて見た。たゆまず不斷の努力を續けて居る。

音が段々大きくあつて来る様だ。私は更に此のキチ〜といふ音以外に、もつと微かな音がせなだらうかと、なほも耳へあてた儘、チーツと聞き澄ました。

